建設ぶらり旅

# 見沼代用水と見沼通船堀

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

井澤為永の頌徳碑がある万年寺（さいたま市見沼区片柳）は、元禄初年に見沼が氾濫した折に、伽藍を移したと伝えられている。そういえば、見沼自然公園からここへ来るのに短い坂道を登ったので、台地上に位置するのだろう。

見沼は寛永六（一六二九）年に造られた灌漑用溜池だった。東西北を囲む三つの台地へ複雑に入り組んでおり、現在のJR東浦和駅のすぐそば、東西の台地がもっとも近付く場所で八丁堤によって締め切られていた。

当初の見沼は灌漑施設として機能したものの、次第に貯水力が衰え、水害も発生する事態となり、干拓して新田を開発することとなった。しかし見沼をつぶすと代わりの灌漑用水が必要となる。こうして「見沼の代わり」に計画されたのが、見沼代用水だった。

見沼代用水は、利根川右岸の下中条（埼玉県行田市）に水源を求め、途中で二線に別れて、見沼の東西の台地縁を通って八丁堤に至る。東側の用水を見沼代用水東縁、西側を見沼代用水西縁といい、東西二線の代用水は八丁堤から、それぞれの灌漑水域へと向かう。

一方、用水路の開削と同時に見沼の干拓も行われ、八丁堤を切り割って新設した水路を芝川へと接続し、荒川へと余水を放流した。かくして全長九〇キロメートルにもおよぶ見沼代用水は、享保十二（一七二七）年九月から翌春にかけての半年ほどで完成し、見沼の跡地には約一、二〇〇ヘクタールの広大な新田が拓かれた。

さらに見沼代用水によって、利根川から芝川、荒川を経て江戸へと水の流れが繋がったこととなる。ここに舟を通せば、年貢など物資の流通に都合がよい。

しかし見沼代用水は東西二線とも台地上を通るので、荒川へと通じる芝川とは三メートルほどの高低差がある。そこで享保十六（一七三一）年、東西の台地がもっとも狭まる場所。すなわち八丁堤の北側に閘門式運河「見沼通船堀」が開通した。閘門とは、二つの水門とその間の閘室からなり、閘室に舟を入れたのち、水門を順次開閉することで水位差を調整して舟を通していく。見沼通船堀は芝川をはさんで東側は三九〇メートル、西側は六五〇メートルと分かれており、閘門はそれぞれ一ヵ所設置された。

これは、しばしば日本現存最古の閘門式運河と説明されるが、岡山県倉安川の吉井水門は延宝七（一六七九）年、島根県斐伊川の来原岩樋は元禄十二（一七〇〇）年の完成とされ、いずれも見沼通船堀に先んじている。また閘門式運河であるか議論されている岡山県倉敷市の「高瀬通し」は、延宝年間（一六七三～八一年）に完成したと考えられているので、さらに順位を落とす可能性もある。

昭和六（一九三一）年に役目を終え、現在は国の史跡として復元保存されている見沼通船堀を、東から西へたどると、JR東浦和駅はすぐ目の前だ。目論見どおり、腹も空きはじめてきたし、帰るころには程よく飢えているに違いない。今夜のビールの味を思って、思わず顔がほころんだ。

見沼通船堀　東側一の関（水門）

［交通］JR東浦和駅より徒歩15分